

乳がんの話 広報げろ 2008.4

乳がんの話

乳がんは40代後半の女性に最も多く発見されてきています。この年代は家庭に対しても社会にたいしても責任の多い時期であり、癌で倒れることの影響は計り知れません。乳がんは早期に発見し治療すればほとんど完治する病気です。乳がんを早期に発見するためには第一に、自分の乳房に感心を持って市などが行う検診に任せるのではなく月一回の自己検診を行うことです。少しでも異常を感じたら検診を待つことなく病院の乳腺外来を受診しましょう。

一般に乳がんの診断は問診、医師の視触診とともに、超音波診断（エコー検査）、マンモグラフィー（レントゲン検査）などを組み合わせて行います。どの検査法も一長一短で二つの検査を組み合わせて行うのが最も効果的です。

乳がんのほとんどはしこりを作ってきます。超音波診断はスイカを割って中身を見るように乳房の断面を見るので、このしこりをはっきり確認でき、より確かな診断ができます。このため40代から50代の、乳腺がまだ多くマンモグラフィーで診断困難な乳房の検査に最適です。

マンモグラフィーは乳房を二枚の板で挟んで薄くし、その一方からレントゲン線を当てて映し出される影をもとに診断します。乳腺の多い乳房には影の重なりも多く診断が困難です。50代以降で乳腺が少なくなって脂肪が多くなった乳房ではよく透き通って影も少なくしこりがきれいに映し出されます。またマンモグラフィーでは乳がんの半数近くに、がんを疑わせる微小な石灰化像が映し出されます。しかしがんの半数以上はこの石灰化が映し出されないの困ります。しこりを作らずこの石灰化像だけで診断できる乳がんは全乳がんの数パーセントです。現在行われているマンモグラフィーによる乳がん検診では乳がんのすべてを発見できるわけではなく、検査を受けないよりうけたほうが早期発見、ひいては良好な予後につながる人が多いということなのです。以上のことから検診においては乳がんが最も多く発見される40代から50代は超音波検査を、60歳代以降はマンモグラフィーをまず受けてみるのがよいでしょう。

このような検査でがんが疑われると、超音波画像で針先を確認しながら、細い注射針をしこりに刺して細胞を吸引する細胞診、太い針を刺して組織をとる組織診、皮膚に小切開を加えてしこりの全部または一部を取り出す生検などを行い診断を確定します。

乳がんの治療は手術が原則ですが乳がんは手術ばかりでなく術後10年、20年にわたる長期の経過観察が大切です。金山病院では乳がんの診断から手術その後のきめ細かい経過観察まで身近な病院として皆さんとともに乳がんを戦っていこうと考えています。

下呂市立金山病院 院長 古田智彦